

医療画像診断 AI解析

琉球光和販売 医師の負担軽減

医療機器販売の琉球光和（那覇市、秦一社長）は、県内の医療機関に医療画像診断支援AI（人工知能）「EIRL（エイル）」の導入を進めている。ソフトウェア会社のエルピクセル（東京都、鎌田富久社長）が開発したソフトで、AIを活用することで診断の際の見落としを防ぎ、医師の負担軽減につなげる。

エイルは、胸部や脳などの医療画像データや、大腸内視鏡の動画をAIが解析する。多数の医療メーカーのデータを学習しているため、既存の医療機器で導入可能。国内の医療施設の千カ所以上で導入実績がある。

胸部のX線画像診断では、画像をAIが解析し、肺がんなどの疑わしい異常陰影を検出する。病気を見つげられるかを示す「感度」は84・2%、どれだけ正しく除外できるかを示す「特異度」は95・9%。検診センターなど、X線画像を大量に診断する場での活用が期待される。

大腸の内視鏡検査では、リアルタイムで大腸ポリープ候補をAIが検出し、アラート表示する。

琉球光和は、県内の医療施設53カ所に導入を提案中。AIが診断するデータ量で変動するが、利用料は月6万～50万円。ソフトの導入費用として50万～100万円ほどかかる。

秦社長は「AIを活用し、医師の労働環境を良くすることは患者の安心にもつながる。これからは医師とAIによる診断が当たり前の社会になる」と話した。

（政経部・山田優介）